

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-12

研究展望 2020年（令和2年）

宮崎, 眞帆 / 表, きよし / 高橋, 悠介 / 深澤, 希望 / 中
司, 由起子 / 山中, 玲子 / 伊海, 孝充 / 横山, 太郎

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute
of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

213

(終了ページ / End Page)

242

(発行年 / Year)

2024-03-25

研究展覧 二〇二〇年（令和二年）

二〇二〇年に刊行された能・狂言の単行本、および雑誌等に発表された論文を取り上げる。例年と同じく、単行本（表きよし）、資料研究（高橋悠介）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（深澤希望）、作品研究（中司由起子）、技法・演出研究（山中玲子）、狂言研究（伊海孝充）、その他（横山太郎）、外国語による能楽研究（宮崎真帆）に分類し、所員による分担執筆をおこなっている。もとより一本の論文が扱う内容が一つの分類項目にだけ当てはまるということはなく、分類は当該年の研究全体の傾向によって便宜的になされていることを、お断りしておく。分担執筆の結果、個別の論の紹介が中心となり、全体を展望する視点は十分ではないかもしれない。重要な論稿を見落とすなどの遺漏もあると思うが、ご寛恕を願う。

【単行本】

『黒川能 1964年、黒川村の記憶』（船曳由美著。A5判392頁。1月。集英社。三六〇〇円〔税抜。以下同〕）

平凡社で雑誌『太陽』の編集に携わった著者が、山形県の

黒川能を特集として取り上げるため、一九六四年11月に初めて黒川を訪れて以来、黒川に頻繁に足を運んで翌年2月の王祇祭に参加し、祭礼の様子やその前後の人々の様子を詳細に書き留めたもの。当時の王祇祭の様子が詳細にわかることはもちろんだが、王祇祭で終わりではなく、その後の春から冬に至るまでの黒川の様子も記されており、地域にしっかり溶け込んで取材を続けた著者ならではの内容となっている。

『伝説の面打ちたち』（東京国立博物館編。A4判24頁。1月。東京国立博物館。六〇〇円）

1月2日から2月24日まで東京国立博物館で行われた特集展示の作品紹介。赤鶴・日光・文蔵・龍右衛門・越智・増阿弥・徳若・春若・福来・宝来・千種・日水という12名の能面作者による面が展示された。面裏の写真も掲載されており、面裏に記された銘がわかるようになっている。解説の執筆は浅見龍介と川岸瀨里。

『マンガでわかる能・狂言』（マンガでわかる能・狂言編集部

編・小田幸子監修。A5判159頁。2月。誠文堂新光社。
一六〇〇円)

タイトルどおり多くのマンガを用いた能・狂言の入門書。1章「ギモンに答えます」では初心者が能・狂言に抱く疑問に回答、2章「能の楽しみ方完全ガイド」では鑑賞するにあつての留意点を説明する。以下、お勧めの曲や注目すべき登場人物、謡・舞・囃子の体験の様子など、能・狂言を身近に感じられる内容である。

『絵解く 戦国の芸能と絵画―描かれた語り物の世界』(小林健二編。B5判213頁。3月。三弥井書店。三五〇〇円)

幸若舞曲の絵巻や絵本について考察した書だが、個人蔵『源義経一代図屏風』の考察(小林健二担当)において、能(安宅・橋弁慶・船弁慶)の考察が指摘されている。この屏風は六曲一双で、常盤御前が三人の幼子を連れて逃避する話から平泉高館での義経の最期までが描かれており、幸若舞曲だけでなく古浄瑠璃や能楽も利用しながら、『義経記』とはやや異なる義経一代記となっているという。

『亡霊たちの中世』(高木信著。四六判380頁。3月。水声社。三八〇〇円)

軍記物語や室町時代物語など様々な古典文学作品をもとに亡霊を論じたもので、能の作品を通じた考察がかなりの部分を占めている。取り上げられる作品は第一章(二人静・吉野

静)、第二章(鶴)、第三章(八島)、第四章(善知鳥)、第六章(忠度)、第七章(須磨源氏・敦盛)、第九章(重衡・千手)、第十章(卒都婆小町)、第十一章(隅田川)といった具合である。「怨霊」化とは、死者を現世に回帰させるといった具合であり、死者が現世に影響を与え、現世の出来事に介入しているとする思考である」とか「亡霊化とは、死者と生者が親密圏を構築するというやり方においては触れあえないものの、触れあうことができるかもしれない可能性という可能性を生きることである」など定義の把握が難しい。能の詞章を緻密に分析しながら論が進められ、独特な視点から亡霊の持つ特性を考察している。

『京都の能楽愛好家』(高橋葉子・藤田隆則編集。A5判72頁。3月。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。非売品)

小冊子の科学研究費助成事業研究報告書。京都において、家族や親戚をあげて謡や舞を楽しんだ時代の記憶を残そうとまとめられたもの。能楽愛好家の林家・関家・高橋家の三家にインタビューを行い、その口調を残すよう配慮しながら編集されている。兄弟姉妹とその配偶者10人で家族能や奉納謡会を催す林家、一族が揃って能楽を趣味として家族能や奉納謡会を催す関家、能の稽古に真摯に取り組み大原野神社薪能開催にも尽力した高橋家と、それぞれの能楽への関わり方が詳しく紹介されている。

『能・狂言の音声ガイド・字幕に関する研究序説 上質のコンテンツ制作のための方法論の確立と情報の蓄積・共有化に向けた基盤整備への試み』(武蔵野大学能楽資料センター編。A5判261頁。3月。武蔵野大学能楽資料センター。非売品)

稲生雅治・恵子能楽振興基金の助成を受けた鑑賞補助ツールに関する研究の報告書。取材編と論考編、アンケート編から構成されている。取材編(音声ガイドについて、字幕について、音声ガイド・字幕・副音声・テロップについて)には鑑賞補助ツールを導入している催しに関わる人から具体的に話を聞いた結果がまとめられている。論考編はタブレット端末を使用した字幕サービスを実施している檜書店の論考と、この研究の中心となった三浦裕子センター長の論考が掲載されている。アンケート編はセンター主催の狂言鑑賞会と靖国神社の夜桜能で行ったアンケート結果の集計である。能は難しいと敬遠されないためにも補助ツールの重要性は増していると思われ、苦勞しながらいろいろな取り組みが行われている様子がよくわかる。一方でアンケート結果からは観客の補助ツールに対する要望の多様さが窺え、対応の難しさが思い知らされる。

『能楽囃子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相―入門者摘録』(全二冊)研究 第一巻 翻刻編』(武蔵野大学能楽資料センター編。A5判231頁。3月。武蔵野大学能楽資料センター。非売品)

科学研究費助成事業の研究成果報告書。太鼓方観世家所蔵の『入門者摘録』二冊の翻刻を掲載する。同書は文化六年(二八〇九)から昭和二十一年(一九四六)までの一四〇年間に太鼓観世家に入門したのべ一六〇〇名の弟子に関する情報を記録したものである。この第一巻は翻刻のみだが、いずれ「解題・論考・索引編」も刊行されるとのことで、この資料からどのような様子がわかるのか期待される。

『続・能のうた―能楽師が読み解く遊楽の物語―』(鈴木啓吾著。B6判336頁。3月。新典社。二七〇〇円)

観世流能楽師である著者による能の作品についての考察をまとめたもの。二〇一四年に出版した本の続編で新典社選書95。翁と初番目物から五番目物、番外に分類して27曲を取り上げている。それぞれの作品に利用されている和歌を冒頭に掲げ、そこから作品を取り巻く様々な事柄に話が及ぶ。能を演じるにあたって作品の背景にしっかりと目配りしている様子が窺える。番外で取り上げられる(鈴木三郎重家)は著者が復曲上演した作品で、思い入れの深さが感じられる。

『教養として学んでおきたい能・狂言』(葛西聖司著。新書判224頁。4月。マイナビ出版。八七〇円)

元NHKアナウンサーで古典芸能番組を担当した著者による能・狂言入門書。能は「難しいから面白い」として、平易な文章で能・狂言の特徴を解説していく。全体が八章に分け

られ、能楽堂の特徴や、能(国栖)と(安宅)を通して見た能の特徴、狂言(痺)と(千切木)を通して見た狂言の特徴、お勧めの能の作品や能楽の歴史など、様々な事柄を紹介しながら能・狂言の世界に読者を誘っていく。能・狂言に造詣の深い著者ならではの入門書となっている。

『よっこそ伝統芸能の世界 伝承者に聞く技と心』(森田ゆい著。A5判167頁。4月。薫風社。二〇〇〇円)

能楽・文楽・日本舞踊など日本の伝統芸能に携わる人々へのインタビュをまとめたもの。能楽からは、シテ方関根祥雪・狂言方山本東次郎・小鼓方大倉源次郎が登場する。インタビュはさほど長いものではないが、稽古や演技など多岐にわたり、著者のコメントも含まれている。また研究報告として「視線追尾実験」「狂言研究資料」が掲載されており、役者の視線やハコビ、呼吸などを検証した結果が報告されている。インタビュの様子がわかるDVDも付属している。

『日本人と自然 能楽と日本美術』(国立能楽堂事業推進課調査資料係編。B5判72頁。4月。日本芸術文化振興会。二二〇〇円)

6月5日から28日まで国立能楽堂で開催された企画展の展示図録。4月8日から開催予定だったが新型コロナウイルス感染症拡大防止のため期間を短縮して行われた。能装束をはじめ様々な器物97点が展示され、春夏秋冬・草木成仏・花鳥

風月の三つに分類して、それぞれに表現された自然の姿を能・狂言の作品と関連付けながら楽しむことができる。

『改訂新版 能のふるさと散歩 京都・奈良編』(岩田アキラ著。A5判216頁。5月。檜書店。二六〇〇円)

能の典拠となった物語の舞台や史跡ゆかりの地を紹介する。京都に関わる能46番、奈良に関わる能16番が取り上げられており、各曲のあらすじ、登場人物、関係する場所が説明されている。「猿楽(能楽)と世阿弥」「能の基礎知識」といった解説も収録されている。二〇〇六年刊行の本を改訂したものである。

『お能健康法 すり足と呼吸で身体がよみがえる!』(井上和幸著。A5判168頁。7月。徳間書店。一七〇〇円)

シテ方観世流能楽師である著者が、自身の体験に基づきながら能の謡や舞が健康維持・増進に役立つことを説く。第1章「健康能楽への道」、第2章「深層筋を目覚めさせるすり足」、第3章「松果体を活性化させる謡」、第4章「医学から見る能楽」、第5章「能の体験と変容について語る」、第6章「能楽師と舞踏家の対話」という構成になっている。医師の寄稿や体験者のコメントも掲載されている。

『伊藤正義 中世文華論集 第五卷 中世文華とその資料(上)』(伊藤正義著。A5判544頁。8月。和泉書院。

一五〇〇〇円)

平成21年(二〇〇九)に逝去された著者の研究成果をまとめた論集。第五巻は「中世文華とその資料(上)」として、能楽関係資料を中心に様々な資料を紹介する。取り上げられているのは島原松平文庫蔵「諸国々名寄」、松陰女子学院大学図書館蔵「おかべのよ一物語」、神宮文庫蔵「能間・作物作法」、丹後浦嶋社神事能史料」(京都府与謝郡伊根町にある神社)、熊本八代松井家蔵「妙庵手沢謡本識語記」、ワキ方福王家蔵「福王家宝物目録記」、法政大学能楽研究所蔵「月次狂言稽古会番組」、諸資料をもとに著者がまとめた「大鼓小鼓大倉家系譜稿」、神戸女子大学古典芸能研究センター蔵「能役者染物見立」、大槻文蔵氏蔵「永正本元広伝書」、大倉源次郎氏蔵の資料を紹介して考察を加えた「宝暦記の四座御役者」である。「おかべのよ一物語」は物語絵巻だが、他は広範囲にわたる能楽資料で、能の歴史を考える上で役立つ情報にあふれている。

『鷺流狂言詞章保教本を起点とした 狂言詞章の日本語学的研究』(米田達郎著。A5判308頁。9月。武蔵野書院。八五〇〇円)

一七一六年から一七二四年にかけて筆写された保教本の詳細な検討を通して、待遇表現や終助詞などの特徴を考察していく。「オマエ・コナタ」といった対称詞、接続詞「デモ」、一人称詞「オレ」、丁寧表現「マシテ御座ル」、終助詞「ワイ

ノ・トモ・ナア」、応答表現「デ御座ル」など考察は多岐にわたる。大蔵流・和泉流だけでなく鷺流の狂言台本も日本語学の研究にもっと活用すべきだと述べている。

『五世茂山千作記念誌』(五世茂山千作記念誌刊行会編。A5判256頁。9月。五世茂山千作記念誌刊行会。非売品)

二〇一九年九月に急逝した五世茂山千作の追悼本。多くの舞台写真を取めた口絵に続き、千作自身がインタビューで語ったことや新聞などに寄稿した文章を取めた「語録」、年譜、茂山家の人々からの「偲ぶ言葉」、玄人弟子からの「悼む言葉」、社中の人々からの「おくる言葉」などで構成されている。五世千作の人柄がしみじみと伝わってくる内容である。

『能をめぐる美の世界―静嘉堂・岩崎家蒐集の能面と古面』(静嘉堂文庫美術館編。B5判156頁。10月。静嘉堂文庫美術館。二五〇〇円)

10月13日から12月6日まで静嘉堂文庫美術館で開催された展覧会の図録。この展覧会では新発田藩主溝口家旧蔵の能面67面のほか、面袋、謡本、小鼓胴、伎楽面などの古面が展示された。展示品の写真や目録のほか、田邊三郎助「新発田藩主溝口家の能面」、川瀬由照「静嘉堂所蔵加納鉄哉関連仮面群について」、成澤麻子「岩崎彌之助と能」、新井達矢「静嘉堂所蔵・新発田藩主溝口家旧蔵能面の修復」といった考察が

収録されている。

『令和2年度国立能楽堂特別展 勸進能』（国立能楽堂事業推進課調査資料係編。A4横変型判104頁。11月。日本芸術文化振興会。二五五〇円）

11月14日から翌年1月17日まで国立能楽堂で行われた展示の図録。室町時代の勸進能、京都の勸進能、江戸の勸進能、大坂の勸進能、勸進能の文化史、近代の勸進能という章立てで、それぞれに関連する資料の写真と資料解説が掲載されている。宮本圭造「勸進能の歴史」では勸進能の変遷や各地域での勸進能の特色が詳しく説明されており、「勸進能年表」には文保元年（一二二七）から明治37年（一九〇四）までの勸進能が網羅されているので、勸進能の全体像を把握する上でも役に立つ。

『伝統芸能の革命児たち』（九龍ジョー著。四六判240頁。11月。文藝春秋。一五〇〇円）

能楽・歌舞伎・文楽・演芸など様々な伝統芸能で活躍する人物について、著者の独特な視点から論じた書。能楽からはシテ方の谷本健吾・川口晃平、狂言方の茂山千之丞、大鼓方の亀井広忠が取り上げられている。著者とそれぞれの役者との出会いや、著者がその役者のどこに注目しているかが説明されている。著者の伝統芸能に対する幅広い関心が窺える。

『謹訳 世阿弥能楽集 上』（林望著。四六判256頁。12月。檜書店。一八〇〇円）

『源氏物語』や『平家物語』など古典文学の現代語訳に意欲的に取り組む著者が雑誌『観世』に連載している能の詞章の現代語訳の中から、世阿弥作と推定される25曲を選んで収録している。掛詞や序詞といった和歌の修辭技巧が用いられるなど現代語訳をするのが困難な能の詞章だが、こうした修辭技巧にも細かく配慮しながらわかりやすい現代語に変換されている。能の内容をしっかりと把握したい人に役立つ書となっている。

『おのずから出で来る能 世阿弥の能楽論、または（成就）の詩学』（玉村恭著。四六判336頁。12月。春秋社。三六〇〇円）

美学研究の立場から世阿弥の能楽論を追究した書。世阿弥に「強い芸術家」としての堅い矜持を見る見方に疑問を呈し、もう一度世阿弥のテクストと向き合うことで世阿弥を捉え直すようにする。演劇的パフォーマンスを構成する要素から、よい俳優・役者・パフォーマンスとはどのような者かという俳優論、よい演技・パフォーマンスとはどのようなものかという演技論、よい作品とはどのようなものかという作品論を重点的に取り上げる。第一章「俳優の魅力とは何か―（花）」と第二章「面白いとはどういうことか―（めづらし）」は俳優論、第三章「声はどこから出るか―（調・二機・三声）」と第四章「どうすればよく似せられるか―（物まね）」は演技論、第

五章「作品をどう構成するか―(序破急)」と第六章「詞章をどのように綴るか―(歌道)」は作品論であり、第七章「観客に何をさせるか―(秘すれば花)」は観客論、第八章「可能性をどう育むか―(初心)」は教育論となっている。キーワードを生かしながら世阿弥の論を分析し、「花」を実現するために必要なのは「和合」を実現させる力、すなわち、敵対・拮抗ではなく参与を促す繊細かつ緻密な知性としたたかさ、そして何より、可能性に開かれた柔らかさ、しなやかさだと主張している。

【資料研究】

謡本の資料研究から紹介する。まず、方法的な問題については、『日本文学』の「文献学をとらえ直す」という特集に掲載された落合博志「能楽研究における文献学の問題」(『日本文学』69―7、7月)が挙げられる。同論文では、謡曲の主要な活字本を概観した上で、現存の謡本は作者の原本から転写を繰り返した結果として存在するのではなく、一部の例外を除けば、原本から発生した諸本を比較校合して原文や原型を復元するという文献学の方法が適用できないとする。そして世阿弥自身も時代時代に合わせて能の本文を改変すべきものと考えていたことを指摘し、室町時代における能の本文改訂について複数の例を挙げる。その上で、古い時代の本文だけでなく変化する本文に意味を見出すことも必要であり、そうした動態を全体的に捉え、多様な本文発生のあり方を考

える「文献学」が構想される必要があると提言する。特に室町時代における本文改訂の例が興味深く、謡本の本文を考える際に重要な視点を示した論文といえる。

伊海孝充「車屋謡本刊本考―鳥養道断が作った謡本」(『能楽研究』44、3月)は、車屋謡本の整版本・古活字本に関する総合的な研究。まず古活字本より先に整版本が作られたとし、『言経卿記』の検討などから、慶長二年頃から準備に入り、同四年頃から刊行作業が本格化、同五年一月に最初の曲が完成、同六年三月に後陽成天皇に三十番が献上され、鳥養道断が亡くなる慶長七年までに七十番程度が完成したと位置づける。また、整版本と古活字本の諸本を整理し、整版本は本願寺旧蔵龍谷大学図書館蔵本、吉川家旧蔵鴻山文庫包背本などが初版であるとし、古活字本については、道断の子息・新蔵などによって整版本刊行後に整版本を補完するように制作されたとする。そして、古活字本の版組について、節の行だけが細長い一つの活字のように文字行の間に嵌め込まれていると推測する。最後に、車屋本は謡の音を伝えるよりも、本文理解を追求した書籍としての特徴が際立つことを漢字の宛て方などから指摘している。

高橋悠介「享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂(一)」(『斯道文庫論集』54、2月)は、観世文庫にある観世大夫家伝来資料のうち、將軍嗣子の徳川家重がいた江戸城西丸に観世清親が献上した謡本のおえの可能性がある謡本を紹介し、末尾に「家重公御本」と記された室町期写の謡本と西

丸献上本の密接な関係について検討したものの。また、「東方朔」を例に、西丸献上の外組曲の本文をさらに改訂する形で明和改正謡本の本文が形成された可能性を検討する。

原八千代「江戸の小謡本と地本問屋―能面図入小謡本の流行を中心に」(『能と狂言』17、12月)は、江戸出来の草紙類や浄瑠璃本を扱う地本問屋が中心となって刊行した小謡本について、覆刻・模倣が殆どであり、頭書能面図入本が流行すること、大型題簽、肴謡の存在、番外曲が多いことなどの特色を指摘する。そして、江戸の頭書能面図入小謡本四十四種を系統分類し、覆刻関係などをふまえ、藤屋本系統の後に、山本九左衛門本系統と鱗形屋孫兵衛本系統が展開した様相を示す。

続いて、記録類を紹介したものに移る。入口敦志・江口文恵・田草川みずき・深澤希望・柳瀬千穂・山吉頌平・竹本幹夫(『葛巻昌興日記能楽関係記事稿(貞享四年正月―六月分)』(『演劇研究(演劇博物館紀要)』43、3月)は、前田綱紀に近侍した葛巻昌興の日記(金沢市立玉川図書館近世資料館加越能文庫蔵)にみえる芸能関係記事紹介の連載で、貞享四年(一六八七)の前半期、六月までの能楽関係記事に解説が付されている。

大谷節子「浅野太左衛門家旧蔵『他郷盟順簿』解題と翻刻並びに影印」(『成城國文學論集』42、3月)は、京都観世会が所蔵する浅野太左衛門家旧蔵資料(浅野文庫)のうち、浅野家八代栄足が同家の四代栄貞以来の京以外の門弟を国別に

まとめた仮綴の門人録『他郷盟順簿』を翻刻と影印で紹介する。記載年月日の最も古いものは宝暦二年(一七五二)で、最後は文政十三年(一八三〇)といい、江戸中期の浅野太左衛門家の活動範囲などを知ることができる資料となっている。

また、能楽学会の二〇一八年大会企画「美術工芸と能楽」をもとにした論文が、この年刊行の学会誌に掲載されたうち、長崎巖「描かれた能狂言装束―『獻英樓畫叢』に描かれた能装束」(『能と狂言』17、12月)は、文政七―十三年、天保三年にわたって様々な器物・装束・絵画などを模写した紙を貼り込んだ田安家旧蔵『獻英樓畫叢』の資料的意義を説く。東京国立博物館他に所蔵される同書の能装束関係記事を集めると、唐織25点、縫箔14点、摺箔9点、厚板6点、厚板唐織3点、狩衣4点、長絹12点、舞衣1点、水衣1点などが収録されており、現在は失われた作品を含め、彩色の模写図と注記によって詳細な情報がわかるといい、こうした模写は装束の模造と関わりがあると指摘する。

『観世』の見返りで連載していた「観世文庫の文書」は、この年の3月までで132回にわたる連載を終えた。1月から3月までの3回分(『観世』八七―一〇三)では、観世文庫にある「福王雪岑画元章賛弓矢之立合図」「卒都婆小町図」「伊賀国服部氏参考」を紹介している(執筆者は順に小林健二・長田あかね・中尾薫)。4月からは、その同じ見返りで檜書店所蔵の「観世元章相伝作物図」の連載が始まった。4月号には天野文雄による資料概要が載り、5月から8月まで順に

〈舍利〉の舍利塔、〈蟻通〉の傘と灯笼、〈融〉の田子、〈呉服〉の機台の図が、写真と解説により紹介されている(執筆者は順に中司由起子、中尾薫、柳瀬千穂、鶴澤瑞希)。「観世」八七―四〇八。(高橋)

【能楽論研究】

能楽論研究はこの年も少なかった。宮本圭造「『風姿花伝』第四神儀篇の申楽起源説の背景―根本枝葉花実説との関係をめぐって―」(『鍬仙』701、3月)は、神儀篇の各条について、猿楽の様々な起源説を羅列したのではなく、神代↓仏在所↓日本国という単一のベクトルのもとに配置された起源伝承と捉える。そして、その背景に「根本枝葉花実説」、すなわち神道を神儒仏の根本に位置付け、その種から生じた枝葉が震旦の儒教、その枝葉から生じた花実が天竺の仏教で、それが花落ちて根に帰るごとく日本に再びもたらされたという神道説の影響があった可能性が高いとする。また同説が特に吉田神道にみえることから、神儀篇に吉田家が関与した可能性を視野に入れる必要があるとし、吉田兼熙が世阿弥に相伝した書として『兼右卿記』に「申楽翁大事日本紀」という本がみえる問題についても言及する。

また、岩崎義則「平戸藩楽蔵堂文庫本『花伝書』の伝来について―松浦静山『甲子夜話』の記述と関連史料の分析から」(『史淵』〔九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門〕157、3月)は、平戸松浦家の楽蔵堂文庫蔵の八帖本花伝書に

ついて、松浦静山が『甲子夜話』で観世黒雪撰とし、黒雪が江月宗玩(博多崇福寺住持、一五七四―一六四三)に随行して平戸に来訪した際にもたらしたと記している記事には根拠がないことを論証する。楽蔵堂の蔵書目録『新增書目』内篇卷四下の記事から、松浦静山の情報源が小鼓方の服部総三郎であつて直接確認した訳ではなく論拠が薄いこと、江月の平戸投宿は黒雪没後の寛永十四年(一六三七)しか史料的に確認できないことなどを論じている。

その他、竹本幹夫「世阿弥と仏教」(駒澤大學佛教学研究)23、2月)は、主に作品を対象とした研究だが、仏教思想に関わる点で便宜上、本項で紹介する。同論文では、能の詞章における仏典引用について、観阿弥やその同時代役者の作品では単一の素材からまるごとの引用を行う場合がしばしばであったのに対し、世阿弥の場合は多岐にわたる素材から仏語を引用し、相互が関連し合つて作品の主題を構成していると分析する。また、世阿弥が犬王の影響のもと、特に仏典の持つ音律的な魅力を作品に活かしている点を指摘する。(高橋)

【能楽史研究】

能楽史に関する論考を年代順に取り上げる。本年は近現代を対象とするものが多くあつた。

観阿弥・世阿弥以前の猿楽を扱う論考には、竹本幹夫「芸能市場としての寺院」(『中世文学』65)がある。猿楽が演じ

られる寺院の場とは何であったかを問う論考。諸資料を再考しつつ、『法隆寺嘉元記』正和六年四月十二日条の「修羅ト帝尺トノ事」の風流が、劇形態であったならば猿楽能の模倣のほゞで独創とは考えにくいと指摘。延年大風流から能が発生したという古典的な説を否定して「寺院は芸能を創造する場ではなく、消費する場であった」とする。

戦国期に関しては、樋口英江「豊後大友氏の能楽関係史料年表稿」(『藝能史研究』229)があり、「編年史料篇」(同時代史料)と「編纂史料篇」(後代編纂史料)に分けて全十五点の資料に考察を加える。大友義鑑(一五〇二〜五〇)・宗麟(一五三〇〜八七)父子の時代に豊後を訪れ、交流のあった能役者の動向を通観でき有益。

江戸期は以下の五本の論考があった。佐藤和道「田原藩の能楽」(『能と狂言』17)は、二代藩主康雄の治世にあたる元禄・享保期の催能を「謡初」「首途祝・社参の能・囃子」「慰能・町入能」の三つに分類し論考。田原藩の能の担い手は藩主及び藩士で、お抱えの能役者は存在しなかったこと、康雄の死後急激に衰退したこと等を指摘する。

宮本圭造「勸進能と落首」(『国立能楽堂』445)は、貞和五年(一三四九)四条河原勸進田楽の落首から、弘化五年(一八四六)の宝生大夫勸進能まで、さまざまな落首を点綴する論考。役者の称賛・批判、入場料の値上げを嘆く声、弁当の売れ行き等、勸進能をめぐる交々が読み解かれる。

澤木政輝「謡講〜京に息づく謡曲文化」(『国立能楽堂』

443)は、服部宗巴(一六〇九〜七三)にはじまる京観世の歴史を手際よく概観した上で、平成十三年に井上裕久師主導で復活された謡講の取り組みを紹介する。

大谷優紀「近世の大名家における能楽と能道具の受容に関する研究」(『鹿島美術財団年報』38)は、早稲田大学會津八一記念博物館蔵・富岡重憲コレクションのうち、付属文書から臼杵藩主稲葉家伝来でその後昭和三十二年まで東京帝室博物館蔵と知られる「べしみ」「平太」「曲女」の三面を紹介なかでも面裏の刻銘に「酒井惣左衛門作／為盛(花押)／天文九^庚五月三日／奉納／白山妙理権現／願主戊辰歳」とある「べしみ」に焦点を当て論じる。面裏の貼紙に「長美べしみ」とされるが、目頭・目尻の表現に「目頭が矢り目尻は丸くつくられている」という特徴があり、定型が確立される以前の造形を留める作と指摘。能面の発展と派生の過程を伝える上で重要とする。

池田晶「近世日吉神事能の復元的研究―翁詞章を中心として―」(『佛教大学総合研究所紀要』27)は、直面の一人翁で演じられる「日吉の翁」の起源を考察する。元禄期から幕末までは通常の翁だったが、明治維新の神仏分離令を契機に明治五年以降、一人翁に変更されたと、延暦寺務方史料「日並記」によって指摘。併せて、近世の「日吉の翁」を代表する詞章として、影山常陸宛河村由右衛門友信奥書「観世改正神哥 全」(大津市歴史博物館蔵)を分析する。影山は安永・寛政頃の比叡山東塔北谷惣持房の山門公人。詞章末尾に見える

「引合片山九郎右衛門」は二代豊慶で、「どくどくだらり」と詞章に見えることから、元章の改正以前の形を留めると論じる。

つづいて幕末・明治期は、以下の三本があった。鎌田紗弓「初世藤金芦船・初世中村寿鶴をめぐる一考察―歌舞伎および吾妻能狂言出勤以前の足跡―」（『東京藝術大学音楽学部紀要』46）は、歌舞伎の鳴物方に転じたことで知られる初世藤金芦船と初世中村寿鶴の、能の囃子方時代の事績を追う論考。芦船（加藤宗三郎）自身が静岡県土族と名乗っている点を『藤岡屋日記』等から裏付けし、寿鶴（藤井金之助）については『梅若実日記』や観世新九郎文庫『色々おぼえ書』等から小鼓方観世流藤井家の出自と明らかにする。

杉本亘「明治初期の梅若実の活動とその影響―能楽興行における料金体系の観点から―」（『演劇学論叢』19）は、席料システムの端緒を、梅若実が明治三年一月二十九日に自宅で開催した稽古能だと指摘する。座席の等級によって値段を設定する方法は、勧進能や歌舞伎を参考にしたものとして推定し、その後、金剛唯一の飯倉町舞台や芝能楽堂へも影響した可能性を示唆する。

細谷由希「能楽の帝劇出演問題の議論からみえる近代における「能楽観」について」（『昭和音楽大学研究紀要』39）は、一九一二年開場一周年で企画されたから、四二年の実現まで、実に三十年の時を要したという能楽の帝国劇場出演をめぐる、その間の諸氏の議論を整理・検討する論考。能楽保護

（保存）をめぐる発言の背景には「享受層の拡大に伴う新しい試みに対する危機感」があったと指摘する。

外地の能楽については次の二本があった。王冬蘭「桂六平と能楽雑誌『能海』―植民地台湾における能楽の一考察―」（『演劇学論叢』19）は、一九〇二年頃から一九一六年まで喜多流謡曲指導者として台湾で活躍した桂六平に関する論考。喜多六平太の招聘（一九〇五年台湾神社大祭や一音会・喜謡倶楽部の組織、能楽雑誌『能海』の刊行等の事績を辿る。

佐藤和道「一九三〇年代大連・満洲における能楽―満洲ツーリズムの発展と演能旅行」（『演劇研究』43）は、日露戦争の勝利によって租借権を獲得した大連、満洲事変によって成立することになった満洲国が、当時の能楽師たちにとって遠い異国の「辺境」から訪れやすい「海外」へと変化したことをツーリズムの興隆という観点から考察した論考。一九二九年刊行『満洲芸術壇の人々』に基づき作成された地域別能楽愛好者数、一九三〇年代に満洲・中国を訪問した内地の能楽師一覧などの付表も充実。当時の状況が具に分かって有難い。

最後に昭和期。飯塚恵理人「能楽藤田流笛方小島鉄次郎の周辺―故松田直子氏旧蔵資料と御遺族の聞き書きから―」（『名古屋郷土文化会郷土文化』74-2）は、昭和八年前後から四十年代前半まで名古屋能楽界で活躍した藤田流笛方小島鉄次郎（一八九二〜一九六七）の事蹟を明かにする論考。副題にある「故松田直子氏」は鉄次郎の娘。鉄次郎は、長唄の家元

初代杵屋三太郎を父に持つという異色の出自で、太平洋戦争後の厳しい時代、藤田流家元の藤田豊二郎を芸事上でも経済的にも支えた人物であることを紹介する。

「メディア」と上方の芸能」の特集が組まれた『大阪春秋』（4813）には、能楽に関係する稿として、①関屋俊彦「元朝日記者 北岸佑吉所蔵能楽写真」、②辻山幸一・大山範子・飯塚恵理人「辻山幸一氏所蔵SPレコードコレクションに聴く上方芸の魅力」、③飯塚恵理人「SPレコードが芸能に与えた影響」を所収する。①は関屋氏が古書店で購入した写真資料の一部解題で、「春日大社鎮座能 昭和四三年一月一日〜日」、「春日御能復興会 昭和二年一月一日」、「大西信久（養老）水波之伝・昭和四〇年七月一日」等十点について写真とその解説をまとめる。②は辻山氏所蔵のSPレコードをデジタル化し、九つのジャンル（落語・落語Ⅱ・新派劇・喜劇・新内・歌舞伎・謡曲・義太夫・清元）に分類して配信する「メディア」と古典芸能研究会」(<http://zseamii.sugiyama-u.ac.jp/~izuka/erit01/>)のこれまでの活動と今後の展望を紹介する。③は、SPレコードの普及がもたらした変化を論じ、芸能と身分階級との結びつきが解消され新しい愛好者が生まれたこと、昭和初期の観世流・喜多流においては謡本付き独吟レコードの発売によって急速に東京の家元の謡一方に統一されていったこと等を指摘する。（深澤）

【作品研究】

最初に紹介する『観世』は二〇二〇年五月から隔月刊となったが、本年も充実した論が掲載されている。小林健二『阿古屋松』の塩竈明神（3月）は、（阿古屋松）のシテが実方を阿古屋の松へと「しるべ」をするということが、『塩釜社縁起』で後に塩竈明神と称えられた岐神が老翁の姿で天孫降臨にて神々の案内をする点や、『神代物語』で塩つつの翁が彦火々出見尊を龍宮に導いた点とイメージが重なる指摘する。後場の移り舞では塩竈明神と阿古屋の松の精が混然一体となるという説に対し、シテは前場と後場で塩竈明神として一貫しているとの説をあげる。また一月号と二月号の松岡心平「実方に舞を捧げる塩竈明神―能「阿古屋松」の一断面―（一）（二）」は、『観世』二〇二二年三月号・四月号に発表されたものである（『能楽研究』40「研究展望」にて既出）。

馬場あき子「破格な老女像の魅力」（7月）は、（卒都婆小町）の小町像が①道行の「余情幽艶」の趣、②卒都婆問答の才智ある姿、③昔の栄華の回想に浸る姿、④「乞丐の現実を自覚」し狂気する姿、⑤少将の死を自らの罪として演じる姿の五つに変化する点を、作品の特色とする。

宮本圭造（「蟻通」が目指したもの）（9月）は、世阿弥が「喜阿弥へのオマージュ」として音曲面だけでなく構成も含めて、喜阿弥の田楽能を手本にし作った能として（「蟻通」をとらえる論。『申楽談儀』等の記事や田楽の芸能の検討を通

して、喜阿弥時代に「護法型」とは異なる別の定型、前半の主役が退場した後に、後半の主役神霊が現れるという、複式夢幻能に近い神能があった可能性をあげる。その上で、本来の(蟻通)は老体の謡を中心にする前半と、出現した神が「きびきびとした演技」を見せる後半という、二場物の能として構想された想定し、それに世阿弥が憑物の趣向を取り入れ、シテに老体の宮人を当てて一場物に改作したという過程を明らかにする。

中嶋謙昌「(養老)の霊水」(11月)は、能と養老縁起においては霊水発見を雄略天皇時代とする点、霊水の所在地を本巢郡とする点が共通することから、能が縁起を踏まえて制作された可能性を考察する。ほかにも両者の共通点として、滝と水が別の場所にあること、酒ではなく水が泉から湧くことをあげ、(養老)の核は清水の表現にあると解釈する。中嶋氏には(大江山)を論じた「鬼神に横道なきものを」(『紫明』47。10月)もある。

ここからは『鏡仙』「研究十二月往来」の論考をあげていく。重田みち「近江の能」(兼平)前場・犬王の天女舞の天台信仰―(70)。2月)は、(兼平)の前場には近江猿楽が本来有していた天台信仰、一方後場では浄土信仰が描かれるというように、前後で信仰的性質に違いがある点に注目する。比叡山の信仰を描く現行の前場が犬王の「柴船の能」の中心部分、又は独立の謡物であった可能性をあげる。さらに犬王による天女の能を法華経贊美の内容であったと説く。

岩崎雅彦「(叫べど声が、出ではこそ)―(鶺鴒)「砧」と『六道講式』―」(702。6月)は、地獄の責め苦の定型的描写に広く使われる「叫べど声が、出ではこそ」の表現が、(砧)などとは異なり、(鶺鴒)では鶺鴒使いが体験した現実の出来事の苦痛として表現されるとし、そこに「表現の新たな文学展開」を見出した論。

高桑いづみ「(半部)の作り物と立花」(703。7月)は、複数の型付・作り物資料に見える(半部)の作り物の形状と演出を読み解く。とくに金春流・金剛流の引回シのある作り物や、藁屋根の付いた作り物の時の演出、作り物と小書の関係等を論じる。

中野顕正「乱曲(東国下)小考―『東関紀行』との関わりを中心に―」(705。10月)は、乱曲(東国下)が直接依拠した資料の一つに『東関紀行』があるとし、それを踏まえ(東国下)が盛久の観音生譚を前提としていないことを論じる。(盛久)に(東国下)が取り入れられた際に平貞能の観音生譚を基に翻案されたこと、のちに盛久観音生譚は長門本『平家物語』等に取り入れられた可能性を提示する。

竹本幹夫「(松風)改作論再説」(706。11月)は伊藤正義氏の説に対して、「松風の謡(サシ・下ゲ歌・上ゲ歌)」が観阿弥作曲の原曲名不明の独立した謡物であって(松風)全体とは作詞の在り方が異質であることや、観阿弥原作曲を改作した場合には世阿弥が伝書に明記することから、世阿弥が田楽能(汐波)を翻案改作して(松風)を作ったのであり、観阿弥原作

の(松風)は存在しないことを考察する。

小田幸子(景清)の演出と作風(707。12月)は、『冨家本江戸初期能型付』の記事を検討し、景清と娘の別離場面の演技が重要視されていた点を明らかにし、「父娘の恩愛」が別離場面に集約され、娘が「父の最後を支え、その姿を伝える役割を果たした」と読み解く。

天野文雄「世阿弥の『実盛』と將軍義持」(704。9月)は、能伝書『聞書色々』の記事と『満濟准后日記』を照合し、実盛の幽霊出現を聞いた將軍義持が直ちに世阿弥に命じて作らせたという経緯を想定する。さらに「申楽談儀」十四条と『聞書色々』を突き合わせ、世阿弥が「上」(義持)の命令で(実盛と(山姥)を「当御前」(義持の前)で演じたと解釈する。「鍊仙」以外の天野稿を続けてあげておく。「井筒」の「移り舞」について)『おもて』144)は、業平が『伊勢物語』古注や中世歌学において舞と深く関わる人物と捉えられていたとし、(井筒)の「移り舞」は、有常の娘が業平と一体になり、業平が豊の明の五節で舞ったように舞う懐旧の舞であるとする。(井筒)における『伊勢物語』古注の影響の大きさと、「移り舞」の文辞が世阿弥に始まることにもふれる。

「世阿弥再見——「改作」にみる世阿弥の功業——」(『舞台芸術』23。3月)は、世阿弥の改作の実態と意義を考察した論。世阿弥伝書の検討から、改作が場合によっては改作者の作となる作者観があったこと、改作には大幅な改変、部分的な改訂、翻案も含まれていること、世阿弥は時代の変化(好み)に

合わせた改変を重要視していたこと、「『三道』」に見える規範曲の改訂に「少々」という条件と「作意」を変えないという条件を世阿弥が付けたことを述べたうえで、(鶴飼)(海士)(柏崎)の改作の実態を論じる。とくに(柏崎)の改作では、女性の風体を幽玄とする考えに基づき、世阿弥が男物狂と決別、女物狂へと方向転換した結果、改作(柏崎)が女物狂能の源となったことを指摘。(柏崎)の改作は、女体と女物狂を別の風体にとらえること、つまり「女体の能(鬘物)が女物狂という範疇から脱して、一つの風体」になる、そのきつかけの一つとなったと、その意義を提起する。

天野氏の復曲能上演に関わるものとしては、『国立能楽堂』三月の特別企画公演「岩船」の原形にさかのぼる(439)がある。原(岩船)のシテが前半後半ともに天の探女であること、天の岩船の作り物が出されていたことを指摘、実際の復曲公演の演出についても言及する。四月の企画公演「世阿弥の「泰山木」が歩んできた道——復曲「泰山木」再見——」(440)は、「花に象徴される過ぎ行く春への哀惜」という主題を曲名(泰山木)が象徴すること、(泰山木)の曲名が(泰山府君)に取って代わったこと、演能記録や、金剛流(泰山府君)と観世流(泰山木)の違いなどについて述べる。この公演以前に発表された(泰山木)に関わる論考も示され、合わせて参照できるようにになっている。

以下では書籍、学会誌や紀要等に掲載の論を紹介する。高橋悠介「金春禅竹と自然表象」(『和漢のコードと自然表象

十六、七世紀の日本を中心に「勉強社。3月」は、「定家」に引かれた『拾遺愚草』の定家歌が、「星霜古りたる」と表現される石塔のイメージと響き合い、「年月を経て霜に朽ちる」イメージを前場に行き渡らせていると読み解く。定家葛には、定家の執心の象徴に加え、役行者と葛城神の話に基づくような拘束具のイメージもあること、葛城説話の引用は「葛城」をふまえ内親王の高貴な身分とも関わること、さらには歓喜天のイメージも隠されていることを指摘。「星霜古りたる」式子内親王の石塔にからむ定家葛の造形には、「年開けた雰囲気」や「葛城の女神に擬えられる高貴さ」という「石塔のプラスのイメージ」と、定家の執心や拘束具という「葛のマイナスのイメージ」が一体となっており、「これらの複合の全体が、双身歓喜天の姿とも連動して発想されている」と述べらる。また伝書に見える自然表象については、六輪一露説の「一露」や像輪の検討を通して、「山河大地や草木も含めた万物」「有情と非情を含めた世界」の根源と身体の根源を重ね合わせ、これを水や劔によって表象するという禅竹の構想を示す。

アイケ・グロスマン「能における「執心」の可視化―謡曲テキストの分析を通して―付・ドイツ語訳「殺生石）」(『能楽研究』(44。3月)は、〈船橋・鉄輪・定家・八島・頼政・殺生石〉ではそれぞれの曲趣に合わせて、執心が悪鬼への変身や物質への変化として可視化されていること、目に見えない魂の状態が「過剰な感情の表現」と水に溺れる等の暗喩の使用に

よって、身体的な状態に転換され、具体化・形象化に至ることを考察する。(『殺生石』では初のドイツ語訳が付されている。同じく『能楽研究』所収の西野春雄「令和の《大典》」は、二〇一九年(令和元)七月の横浜能楽堂特別企画公演「大典奉祝の芸能」にて上演された《大典》の論。この上演にあたり大正天皇即位大典を記念して作られた《大典》は現代にふさわしい形に改訂がなされ、西野氏は、その監修・補綴を担当する。本論では、詞章・演出の改訂内容が詳細に示され、大正と令和の詞章を比較掲載する。

大谷節子「能「花筐」と「李夫人の曲舞」」(『白居易研究年報』20)は、花筐が再会を導く皇子の形見であり「皇子の天照大神礼拝の表象」となると指摘。「花筐(形見)」は能(花筐)にて最も重要な言葉「規模のことは」にあたり、それが乱曲「曙」では「言の葉」に改変されている点などから、「曙」は「花筐」の一部を用いて後代に作られた謡物であって、世阿弥作の「花筐」は「李夫人の曲舞」のみを含む形であったと結論する。さらに「李夫人の曲舞」は、「恋慕の激しさ」と、それ故に恋愛に感う苦しみを吐露したものであると読む。

澤野加奈「能《是害》と後醍醐天皇の怨霊」(『演劇学論叢』19。3月)は、〈是害〉制作の時代背景に旧南朝勢力の脅威があるとし、典拠の『是害房絵』に見える金剛山等の霊地と南朝の関係や、『太平記』の後醍醐天皇の怨霊について考察。シテに後醍醐天皇の怨霊が重ねられており、その怨霊を退散させる能として《是害》をとらえる。

植木朝子「能「羊」をめぐる一考察―羊のイメージに注目して―」（『同志社国文学』92。3月）は、歴史的に悪疫の原因とされ、文芸上では死や無常を象徴するという不吉なイメージを持つ羊をとりあげた点が、大団円に至る結末の「どんでん返し」の面白さを際立たせることにつながる。詞章に引かれた二つの羊の説話が、能の展開に重なること、孝行という主題に直結することを指摘。狂言（牛盗人）（鶏猫）との比較もおこなう。

講演をまとめた論考は三本。竹本幹夫「室町期謡本を校訂する」（『能と狂言』17。12月）は、二〇一八年度能楽学会大会での講演に基づく。同一人物の節付による、同一曲の室町期謡本の本文を詳細に比較検討、これらの本文と節付に異文・異同があることを明らかにし、本文校訂のあるべき手法を提起した論。世阿弥時代から室町期を通じて詞章と節付には流動性が存在すること、近代の流儀間等の本文異同はその流動性の延長上にあること、近世の版本謡本が詞章・節付の無制限の流動を止める役割を果たしたことなどを指摘する。『武蔵野大学能楽資料センター紀要』（31。3月）には、二〇一八年度武蔵野大学能楽資料センター事前講座「能と土岐善麿〈青衣女人〉を見る」をまとめた永村眞「二月堂修中過去帳と「青衣女人」―観音信仰の一齣―」と、二〇一九年度能楽研究講座「能・狂言と祭」における、藤原克己「源氏物語」と能の『葵上』『野宮』を所収する。（中司）

【技法・演出研究】

このセクションには、能舞台・能楽堂に関する論考、謡曲の旋律および謡本の記号に関する論考、能楽囃子および鼓胴に関する論考や講座の活字化を、まとめて挙げていく。どの分野も従来型の日本文学研究・藝能史研究のアプローチに加え、建築学、言語学、情報工学等、異なる領域の研究者による論も多く含まれている。

■能舞台・能楽堂

『観世』には1月から4月まで、前年に引き続いて、「観世流と能楽堂の歩み」のシリーズが掲載された。天野文雄「観世流と能楽堂の歩み（7・8）―近現代大阪の能舞台と能楽堂（前・後編）」（1・2月）は、前編では明治期に大阪に建てられた橋岡能舞台、翠柳館舞台、大阪博物場舞台の構造、そこで演じられた能、変遷等を説き、後編は、大正から昭和初期に次々に建てられた能楽堂の概要や建築の経緯と変遷、昭和二十年の大阪大空襲で大槻能楽堂以外が焼失してしまつたこと、戦後の能楽堂再建やその後の様子等をまとめる。前・後編とも、コンパクトながら濃い内容。関連する論考として、同人による「昭和十年の大槻能楽堂落成と当時の大阪能楽界」（『おもて』143。3月）があり、当時の雑誌『謡曲界』等の記事を引きながら新築の能楽堂の規模や祝賀能の詳細、そこに出演した役者たちの動静等を述べており、併せて読むことで大阪に限らず当時の能楽界の様子がうかがえる。

大山範子「観世流と能楽堂の歩み(9) 神戸編」(3月)は、神戸にかつて在った能舞台の概要と、その能舞台設立から戦災での焼失や閉鎖・移築等の経緯を述べた後、現役の能舞台を紹介している。能楽堂設立に尽力した大西亮太郎や上田隆一が能楽の普及のために行った新しい試みや、楠木正成と観阿弥、播磨の永富家に結縁があるという学説が発表されたおかげで能楽堂新築が実現したこと等、興味深いエピソードも多い。

宇田懐「観世流と能楽堂の歩み(10・最終回)九州編」(4月)は、福岡藩の藩主たちと能の関わりについて紹介した後、福岡の住吉神社能楽殿と大濠公園能楽堂、大分の宇佐神宮能楽殿と平和市民公園能楽堂、の新田四箇所の能楽堂の概要を述べている。

なお『能と狂言』17(12月)に掲載の横山太郎「観客席と最新技術…変わりつつある能楽堂の鑑賞環境をめぐって」は、2018年の能楽学会大会で行われたトークセッションの報告。国立能楽堂の座席背面の字幕システムや、繪書店が観世喜正氏の協力を得て始めたタブレットによる字幕解説のシステムについて、簡潔にまとめている。コストの問題や新しい観客と旧派の観客の共存など、課題は多いようだが、過去に比べれば畳の敷敷を椅子席に変えたのも、能楽堂内にレストラを設けたのも、その時々々の新しい試みだったことは、『世』の連載からも明らかなことである。新しい技術の発展に伴い、現代の能界の状況や観客層にふさわしい鑑賞環境をめぐ

ぐる研究や工夫が、今後も続けられることを願う。

建築学の視点からの論考も複数発表された。辻慎一郎「近代能楽堂の建築意匠における日本的表現」(『日本建築学会計画系論文集』85-770)は、明治期から昭和初期の能楽堂(近代能楽専用施設と称する)を考察対象とし、能舞台と「見所」(観覧領域と称する)とがどのように一体化して能楽堂へと変容していくのかを、能楽雑誌の記事や能楽堂の設計図、写真資料、設計者たちが設計意図を記した文献資料等を博搜して跡づける。明治期から大正期にかけては「伝統的な木造の意匠」を基調としていた能楽堂が、昭和期になると、当時の「設計競技においてしばしば要求された意匠」である「日本趣味」の潮流に乗り、日本の表現をより強めていったという同稿の指摘は、土蔵のような外観を持つ名古屋能楽堂の写真など、掲載の絵図や写真からもよく理解できた。中でも、内部意匠について、梅若能楽堂(1919年)と宝生能楽堂(1928年)を比較する部分が特に興味深かった。前者は、古式を厳密に守らねばならない能舞台との様式的な一致を示さず、「換気性能を重視した機能的な観覧領域」を目指したのに対し、後者は、「能舞台と調和し観覧人が近世以前の空間を体験するような、情緒的な側面」を重視したという。さらに、後者の宝生能楽堂では能舞台の様式に合わせ観覧領域も書院造りにしたいところが観覧領域の天上高にはふさわしくなく、「寸法体系と建築様式との矛盾」を解決するために「堂宇」の様式を採用したという設計者の話を引き、これを

「能舞台」という必然的な内在的因子との対応関係による内部意匠の模索」の一つの到達点とする結語も説得力があると感じた。異分野の研究は、研究方法も研究作法も違い、論点を正しく理解できているか不安になることも戸惑うこともあるが、貴重な情報源として扉を開いておかねばならないとあらためて感じさせてくれる論文だった。

なお、前号では「資料研究」の一部として紹介した佐藤圭一・大岩智之共著の連作論文「福山市に現存する能舞台と能楽堂の空間構成に関する研究」は、前号紹介分(その1)〜3)の続稿(その4)〜6)が、今年度も『日本建築学会中国支部研究報告集43』と『日本建築学会大会学術講演梗概集(建築歴史・意匠)』に発表された。どちらも学会員以外には入手にくいものだが、幸い福山大学のブランディング推進研究プロジェクトの報告書として『地域遺産』の理念構築とその保全・継承に関する研究(2022年11月27日にウェブ版を公開)がまとめられた中に、この能舞台に関する一連の研究も、「9. 備後地域内外に残る能舞台や能楽堂の予備調査と復元」として収められている。内容はこのタイトル通り、福山市内に残る能舞台の実測調査と、移築前の舞台の絵図や古写真、図面等の分析とを合わせ、その空間構成と史的変遷を明らかにしようとするもの。こちらはウェブ公開版なので、誰でも簡単にダウンロード可能である。

■謡の旋律・アクセント・リズム

丹羽幸江「世阿弥・禅竹自筆譜への早歌譜の影響―リズム

記号「振り」の撰取―(『昭和音楽大学研究紀要』38。3月)は、早歌譜と金春禅竹自筆『五音三曲集』に見える譜の比較から始め、禅竹譜で用いられる「振り」記号が早歌の角フリと同じ形であるだけでなく、機能の面でもほぼ同じ役割を持っていたことを言う。そこから遡り、世阿弥の初期自筆能本の「フル」には早歌のフリに近い用法と後代の廻シに近い用法があることを示し、世阿弥が「角フリという記号をあまり拘束の強くない形で撰取し、謡にあうように自在に変形を加えつつ、撰取したことが明らかになった」と結論づける。世阿弥の初期の自筆本である(盛久(江口)には「クル、ハル、モツ、フル、ナカム、ヒロフなどの動詞形の言葉」が多用されるが、後には激減し記号に取って代わられると言う指摘は面白かった。一方、なぜ禅竹から世阿弥へ遡っていかなければならないのか、いまひとつ理解できなかった。早歌と禅竹自筆譜とで共通しているゴマのうち六例が後代の謡でも使用されるということは書かれているが、世阿弥の自筆譜ではどうなのか。また、文の末尾では、世阿弥の自筆譜の記譜法が(江口)の三年後の(松浦)では大きく変わっていることから、世阿弥が「より理論的・体系的に早歌の楽譜を学び、積極的にその記譜法を撰取したと現時点では予測する」と言うが、だとすれば、世阿弥から能本を相伝されている禅竹の記譜法と早歌譜をダイレクトに結びつけてよいのか、まだ判らないのではない。より網羅的な調査を踏まえた続稿を期待したい。

坂本清恵「室町末期謡本の胡麻章」『論集』(アクセント史料研究会。2月)は、世阿弥自筆本や金春禅竹自筆『五音三曲集』をアクセント資料として研究してきた論者による、室町末期から江戸初期にかけての胡麻章の研究。室町末期の八世観世大夫元尚に関わる謡本の胡麻章を、七世観世大夫元忠の謡本、観世元頼本、光悦謡本(上製本)、車屋謡本等の胡麻章と比較する。個別のアクセントの検討は門外漢には難しい部分もあり、そうした検討を積み重ねた結論は「室町末期には、胡麻章が示す上げ下げなどもかなり自由だったのである。特にどれがアクセントに忠実な節付けであるのかも言いにくい」というもののだが、検討すべき素材の選択や考察の順序等、研究方法は堅実で、学ぶところが多かった。

田中敏文・伊藤克亘「能の謡のピッチ解析による日本の音階の変遷過程の検証」(『第82回全国大会講演論文集』2月)は、金剛流の能楽師と音楽情報処理を専門とする研究者の共同研究の成果。とはいえ、音響信号の解析データなどは挙がっておらず、「西洋音楽理論では説明困難なヨワ吟の現象をテトラコルド音階の理論で説明する」ことが中心。

■囃子の技法・楽器

『武蔵野大学能楽資料センター紀要』31(3月)には、前年の7月・8月に行われた公開講座「囃す!! 能・狂言カルテット(四重奏楽団)」の記録が収録されている。各回に登場した囃子方と聞き手は、順に、小寺真佐人・三浦裕子(太鼓之巻)、成田達志・高桑いづみ(小鼓之巻)、竹市学・高橋

葉子(笛之巻)、柿原崇志・高橋葉子(大鼓之巻)。一般向けの公開講座の記録で研究的な知見を述べるものではないが、どの回も、それぞれの囃子や楽器について豊富な知識を持つ聞き手が囃子方ゲストとの信頼関係の上に立って巧みに話を聞き出しており、楽器の構造、流儀の違いなども含め、実演者からしか聞けない貴重な情報が多く収められている。

同誌には関連講座の記録として、前原恵美「芸能を支えるもう一つの技…楽器製作をめぐって」も収録。芸能に関わる選定保存技術やその保持者・保持団体のリストや、能の楽器に関わる選定保存技術保持者各人についての詳細等、こちらにも非常に勉強になった。また、伝統芸能の様々な楽器の製作にはそれぞれ異なる特殊な形状のヤスリが必要なのだが、それらを一人で作っていた技術者が制作を止め、技術が途絶えそうだという話は、ミツバチが絶滅したら人類も滅びるという話も連想されて、危機感を覚えずにはいられなかった。まずは伝統芸能を支える技術継承の危機的状況を広く共有して認識してもらおう(我々も認識する)必要がある、今回の報告の意味もそこにあると思われる。広く読まれることを期待したい。

桑原康郎「能楽(猿楽)鼓胴の編年に関する試論…(附)雷雲蒔絵鼓胴のX線CTスキャン調査」(『Miho Museum 研究紀要』20。3月)は、著者自身が最後にまとめているように、鼓胴の変遷に関する高桑いづみ・加藤寛両氏の研究成果を踏まえ、そこに、新たに調査し得た鼓胴のデータを当てはめた

もの。したがって、学問的に極めて新しい知見を示すというものではないが、複数の論文で発表された両氏の成果をまとめた編年図は非常に判りやすく、しかも新たなデータによってこの説を補強することにもなっている。甲津原・天満神社蔵、与謝郡・浦嶋神社蔵および個人蔵の鼓胴のカラー画像や墨書銘、MIHO MUSEUM蔵の雷雲蒔絵鼓胴のX線CTスキャン画像が付されている点も、貴重である。(山中)

【狂言研究】

まず資料紹介・資料研究から。永井猛「新出鷺流狂言『宝暦名女川本』の離れについて」(『能楽研究』44。3月)は、笹野堅旧蔵『宝暦名女川本』の一部(七冊。通称「能研本」)の概要報告で、長らく所在不明であったが、近年能楽研究所所蔵となった本の紹介。名女川本は享保保教本と常磐松文庫本の中間的位置にある鷺流伝右衛門派の台本。すでに翻刻されている檜書店本(七冊)に新たに資料が加わったことで、鷺流台本研究の進展が期待される。同誌には永井・稲田秀雄・伊海孝充「鷺流狂言『宝暦名女川本』「盗類雑」「遠雑類」翻刻」も掲載されており、本号より能研本の全冊翻刻が始まった。今回は盗人類・雑類の冊と雑類の稀曲を集めた冊の翻刻。曲名のみが知られていた(鷺聲)を含む。稲田秀雄(「翻刻」)鷺流問書抜(一)」「(山口県立大学学術情報」13。3月)は、山口県立大学郷土文学資料センター所蔵「鷺流問書抜」の翻刻。今回は、「礎」から「紅葉狩」までの十九曲。同セン

ター所蔵の鷺流関連資料に含まれる間狂言台本四種の一部で、山口鷺流の元祖・春日庄作筆と推定されている。山本晶子「馬瀬狂言資料の紹介(12)―「木実論」について」(『学苑』951。1月)は馬瀬狂言資料紹介の連載。今回は氏が「馬瀬文化二年本」と称する中屋豊和氏蔵『狂言六義』所収の「木実論」の翻刻と考察。「木実論」の台本は、山脇派の三グループと三宅派、合計四グループに分類でき、馬瀬文化二年本の「木実論」は山脇派Bグループの『狂言口授箋』や和泉宗家系本に近いとする。また「木実論」を所収する中林慶三氏蔵「名取川 木実争 三人片輪 太鼓次第一声」の検討も行ない、馬瀬文化二年本の詞章を継承しながら、改訂も認められると検証している。飯塚恵理人「佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「応答」(二)」(『椋山女学園大学研究論集人文科学篇』51。3月)は同誌前号に引き続き、和泉流狂言師佐藤友彦氏所蔵の間狂言の翻刻。今回は(鳥追)から(高野物狂)までの五十曲。所収曲の大半は四番目物で、番外曲を多く含む。中西薫「狂言面小桜武悪」(『紫明』47。9月)は篠山能楽資料館蔵の狂言面の紹介。狂言愛好者の旧家から寄贈された赤鶴作と伝えられる武悪で、小豆色の色彩が剥落した箇所には桜散らしの斑紋が見られるため、「小桜武悪」と称されているという。同館所蔵の「狂言図 首引」(江戸時代後期筆)もあわせて掲載する。

狂言史関係は一本のみ。石井公成「太平記読み、狂言、玄恵法印」(『中世文学』65。6月)は令和元年度中世文学学会春

季大会シンポジウム「中世の仏教と芸能」の記録の一つ。多芸多才の人という伝承が残り、『わらんべ草』には狂言作者の創始とも記されている玄恵法印の実像に迫る論。狂言との関わりについては、玄恵が狂言を作った可能性は低いが、芸能と仏教の親密さや仏教種の狂言の多さを踏まえると、役者などに中国の故事を教えることはあったかもしれないと推測する。

次に作品研究関係。能楽学会二〇一八年度世阿弥忌セミナーの報告である「『テーマ研究』固定化以前の狂言―世阿弥時代から室町末期まで―」（『能と狂言』17。12月）には三本の論文を掲載する。田口和夫「狂言の形成―能大成と狂言大成―」は猿楽から能と狂言が分化した時代の狂言の姿を考察する。延年次第に見える囃子舞主体の演目から一番と数えられる狂言の出現を推測し、こうした「狂言」が能楽大成以前に、能と能の間に演じられていたと考える。また『習道書』にみえる「座敷秀句」を上層階級への演能の場「昔物語」新しい狂言の素材となった説話と捉え、能と肩を並べる狂言の姿を見て取る。大成期の能・狂言を論じる上で、たびたび取り上げられている資料の読み直しから、狂言の古態をより克明に捉えようとしている。植木朝子「狂言と歌謡」は狂言に取り込まれた歌謡の詞章の分析を通して、狂言の面白さを考察する。『梁塵秘抄』四〇八番歌の「花の園」が切利天や兜率天と解釈され、仏教的に理想化されていることを踏まえ、『法隆寺祈雨旧記』に見える「マへくカタツフリト

云フ事」を雨悦びの延年の場を結びつける。また、天正本「湯立」の神楽歌を『梁塵秘抄』との比較から、海路から空路、神功皇后から天照大神へと替えた点と、神への祈りに恋を重ねた点に面白さを見出す。神功皇后伝説を俗な世界に移したという読みと、男女貴賤が交差した『閑吟集』二四三・二四四番歌の配列などから、狂言小舞「柴垣」の面白さを解釈する。一つの言葉の解釈が作品全体の解釈に繋がっていく研究に、「面白さ」を感じた。岩崎雅彦「室町期の説話と狂言」は『直談因縁集』所収説話と狂言の類似性の考察を中心とする。「方便品」第二・五十六話と能・狂言を比べ、「知恵買」と買う物を求めて声をあげるとい設定において「末広かり」、「知恵を買う」という設定において能「安字」との類似性をみる（ただし、『直談因縁集』には売買の設定はないことも指摘）。また、「分別功德品」第六・十七話と比較し、夫婦関係を解消した夫が夢告によって新しい妻を得るとい設定と「因幡堂」との類似性を指摘する。中司由起子「狂言（隠笠）と（宝の槌）の趣向」（『能楽研究』44。3月）は、鬼ヶ島伝来の宝を求める類曲の比較分析。寛正五年の紀河原勸進猿楽で兔大夫が演じた「カクレミノ」を加え、それらの先後関係を説明するのではなく、作品の趣向を検討する。〈隠笠〉は笠の持ち主が着ると姿が消えるという条件を伏線とし、物語が展開し、笠で体を隠す演技から身体的表現を生む。一方、〈宝の槌〉は宝を出す呪文を条件に、出るはずもないものを言葉に取り纏う面白さがある、と分析する。岩崎稿・中

司稿は、両者の直接的影響関係や先後関係を追究するのではなく、同じ趣向が再編成されつつ作品に表れるという作品背景や各々の趣向を分析するという共通性がある。その研究方法自体には賛同したいが、何らかの影響関係が想定される作品を比較するとき、その「関係」に触れないままでおくことには隔靴搔痒の感が残る。田口和夫「狂言〔末広かり〕を遡る」(『鍍仙』699。1月)は天正本をもとに〔末広かり〕を読み直す。先行研究では本曲の構成の脆弱性が指摘されていたが、天正本に扇を笠にとりなした機知が記載されていないことから、買い物失敗と囃子物による浮かれる笑いに緊密性があると考えられる。また天正本では、囃子物の一句目が「御笠山」となっている点に注目し、春日明神が御笠山に「人が笠をさすなら明神は御笠山を笠にしよう」と呼びかける雨悦びの歌であったと読む。納得する点が多かったが、天正本の大名がなぜこの雨悦びの歌で浮かれるのかという点に疑問が残った。小田幸子「一つの袴を二人ではくと―狂言〔袴裂が〕できるまで―」(『国立能楽堂』439。3月)は、国立能楽堂企画公演として、天正本の記述と古画を重ね合わせて上演された〔袴裂〕に関する論。演出は①半袴を半分裂く形、②半袴を全部裂く形、③長袴を全部裂く形、と変化したと推測している。単なる歴史的回顧ではなく、現在の観客に新しい笑いを提供するという企画意図には共感を覚える。木村信太郎「狂言風流雑考」(『法政大学大学院紀要』84。3月)は、狂言風流の中の語りに関する研究。間狂言に拠った語り、独立の狂言語りに

拠った語り、他の素材に拠って創作された語り、典拠不明の語りの四つに分類した上で、狂言風流の語りの意義は、出物登場の一セイと呼応する内容を詳述し、出物が賛嘆すべきものであることを描き出す点にあると考える。さらに、その方法において脇狂言との類似性も指摘する。狂言風流は祝言に重きをおくことを考えれば、当然の考察結果だといえる。先行研究とは異なる見解がほしい。大藏吉次郎・原由来恵「詩歌と狂言―提言に代えて― 歌謡のストラテジー―文藝の可能性―」(『文学・語学』228。4月)は全国大学国語国文学会二〇一九年度夏季シンポジウムの報告。狂言の詩歌を直接的享受①歌の意味、詠む行為が素材となり効果となる表現、②同一語でありながら発声の違いを利用する表現、間接的享受③意味を省き音声によって生じる言葉を使用する表現、④当時の流行歌に型付けした「舞」「仕方」という身体表現の四つにわけ、詩歌と身体表現の関係を抽出しようと試みる。狂言の詩歌の間テクスト性が問題となっているようだが、狂言が身体表現であることを前提に、四つの分類に基づく曲紹介に終始しているように感じられ、主張の本意が汲み取れなかった。謝林「中世歌謡における漢文学受容の側面―『閑吟集』から狂言へ」(『地域政策科学研究』17。3月)は『閑吟集』26番歌の「上林」の解釈と、同歌と狂言(鳴子)との関係についての論。閑吟集では「上の林」、天正本では「上の山」となっている点を庶民の芸能である狂言には漢文の素養を必要とする「上林」が受容しづらかったとし、虎明本が

「上の林」とすることを家元制度導入による台本改作の加速化や『閑吟集』受容の増加の影響と考え、和泉流が「上の山」のままであることを大蔵流への対抗意識と推測する。いずれも狂言史を正確に踏まえ、より慎重な考察が必要だろう。牧野陽子「ラフカディオ・ハーン作『chin-chin Kokakama: The Fairies of the Floor-Boards』と新作狂言「ちんちん小袴」は、ラフカディオ・ハーン作品の狂言化についての考察。「ちんちん小袴」は日本昔話シリーズの続編として刊行された縮緬本の一つで、忘却者の姫が捨てた爪楊枝が精となり、姫を悩ます昔話風の物語で、近年茂山千五郎家によって狂言化された。物語制作の背景を分析した上で、原作のもつ妖気さは消え、夫婦のやり取りにフォーカスされていると考察する。武蔵野大学能楽研究講座「能・狂言の祭」の報告の一つである山本東次郎・山本泰太郎・羽田昶「狂言に見る祭——祇園会・大嘗会を中心に」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』31。3月)もここで取り上げる。(髭槽)煎物(栗隈神明)福部の神(瓜盗人)の紹介が中心。

狂言ではないが、壬生狂言に関する論考もここで取り上げる。八木智生「壬生狂言の地獄劇」(『同志社国文学』92。3月)は元禄時代以前の近世壬生狂言の地獄劇に対する演者・観客の認識を考察する。絵解きから近世の人々の地獄観を推測し、近世初期の種々の文献の壬生狂言に関わる記述をもとに、宗教的性格が強調されてきた地獄劇の娯楽性に注目する。中西恵子「寛政期における芝全交作黄表紙の手法——壬生狂言

を題材とする作品を中心に——」(『国文』133。9月)は、水戸藩狂言師山本藤七の養子となり、大蔵流狂言師でもあった芝全交の黄表紙作品における壬生狂言の趣向の摂取を考察する。『直説見台萩』は登場人物が話さず、詞書の会話文ないことで無言劇としての特徴を際立たせる点、『浮世操九面十面』は壬生狂言の大流行をうけてほとんどの登場人物が面を着用するという点から、壬生狂言の特徴を作品全体に用いるという全交の著述手法を導く。全交の作品ではないが、冒頭で触れている桜川慈悲成作『壬生踊戯作面目』は壬生狂言だけでなく、狂言(三人片輪)の影響もあるだろう。

問狂言研究は、飯塚恵理人の連載「幽玄のいざない」が二本。「葛城」の問狂言諸本における葛城の神の描かれ方の相違」(『紫明』46。3月)は『副言卷』掲載の(葛城)問狂言の紹介。本曲の殆どの問狂言は一言主と女神が同体と説くが、『副言卷』は男神の一言主が葛城山を領地とするため、醜い女神と結婚したと指摘し、元章周辺の国学者の創案と推測する。「(山姥)問狂言の比較から考える山姥の要素」(同誌47。9月)は山脇得平本・『副言卷』・山本東本の比較。(山姥)の問狂言は上路越えの勧め、突然の日没の不思議、山姥の謂れの三要素からなり、これらに西方浄土への距離、家も消える不思議を追加し、さらに山姥になるものの異同も見られると指摘する。最後にこうした差異が生じた原因として、上演時の問狂言の長短やそれを務める役者の裁量が影響していると推測しているが、この点はさらに吟味する必要があるだろう。

最後に狂言に関わる国語学・言語学研究。小林千草「『続狂言記』をアレンジした幕末台本の表現性―その実態と狙い―」（『表現研究』111。1月）は、氏が精力的に進めている成城大学図書館蔵狂言台本の考察。本稿は「成城（遠山）本」と称する六曲所収本のうち（瓜盗賊（瓜ぬす人）を国語学の見地から分析する。『続狂言記』をもとに、和泉流役者が中心に大蔵流役者の協力を得て、「合議」で台本を作ったと推測するが、そのような背景を想定するのは難しいだろう。深津周太「狂言台本における意外性標識―疑問詞「何」に基づく一語文的表現の実態―」（『静言論叢』3。3月）、「意外性標識」と称する「何と」といった相手の発言に対する驚きを表す言葉に注目し、台本間の差異を検討する。虎明本・天理本には中世後期、忠政本・狂言記には近世初期の様相が見え、とし、中世後期から近世初期が「何と」が衰退し、「何じゃ」が台頭する時代だと分析する。米田達郎「驚流狂言保教本に使用される（ウ）ズルについて―①古語型として使用される背景について―」（『大阪工業大学紀要』65。9月）は、狂言台本の記述を①当代型、②古語型（室町時代以来の言葉）、③新古語型（①と②の折衷）と分類する国語学研究を踏まえ、助動詞「（ウ）ズル」を通して②が18世紀以降にどのように継承されているか分析する。「（ウ）ズル」は18世紀ごろ、は尾張で出版された洒落本などに見られる古めかしい言葉であったが、保教本は虎明本と比べると使用頻度が下がり、名女川本では話し手が聞き手に畏まる場面、賢通本では閻魔といっ

た特定の役に限定されているとする。能楽研究者にはない視点からの分析であり、学ぶことも多い論だが、流派・家ごとに台本の用例を増やして分析を加えてみたい問題である。北崎勇帆「近代に口語訳された狂言記」（『国語語彙史の研究』39。3月）は大正八年（一九一九）刊佐久間春山著『新釈狂言記』と『狂言記』の比較考察。近世上方語から近代東京語への変換を下地とするが、両書の比較から近世語から近代語への推移を見て取ることができる。役によって、語尾に『狂言記』の表現が残っていることがある点は興味深い。

【その他】

■美術

内田篤呉「室町蒔絵と謡曲の意匠―男山蒔絵硯箱をめぐって」は、『能と狂言』17の特集「美術工芸と能楽」のなかの1本。第17回能楽学会大会（2018年）における大会企画での講演をもとにした論考である。工芸史の立場から、室町期において蒔絵意匠に謡曲のモチーフが見いだされるかについて検討する。中心的な検討対象は重要文化財「男山蒔絵硯箱」。著者自身によるものを含む先行研究の解釈を再検討し、「女郎花（放生川）（弓八幡）など豊饒な室町文芸の世界を享受している」という解釈を示しつつ、直接的な関係の明証はないと結論する。これは室町期蒔絵には共通して言えることで、蒔絵意匠に謡曲の図像がはっきりと登場するのは江戸時代に入ってからである由。本稿はまた、室町期の蒔絵意匠に

は、モチーフを韜晦する解釈ゲームの様相があること、また古注釈に似た中世独特の附会的想像力があることを教えてくれる。作品制作の前提となっている解釈環境の面で美術工芸と能に共通性があることが窺われて、面白いと感じた。

清水玲子「近代絵画と能・文明開化と芸術」(『国立能楽堂』438)は、まず小堀鞆音、安田鞆彦、横山大観の3人の日本画家について、経歴を確認したうえで、明治期の西洋絵画受容の影響で歴史画が重視されたなかでかれらが描いた作品が、能楽を描いたものと言い切ることが難しいと指摘する。というのは、歴史画が対象とするモチーフと能の作品が対象とするモチーフが重なりあっているからだ。曰く「単に人物を写すのみならず、そこに、能楽の表現しようとするテーマが描き出されてこそ、能の絵画と言うことができる」。この「能をモチーフとしたのかたまたま能と同じモチーフを扱ったのか」という問題は、上述した蒔絵の事情と同様である。これに比してはつきりと能の絵画として解釈できる作品として洋画家川村清雄の『形見の直垂』(東京国立博物館蔵)を分析してみせる。本来の呼称が「形見の直衣」であったことが手がかりに、ここで描かれた少女が能『井筒』において在原業平の形見の直衣を着て業平を思慕するシテに重ねられていること、さらに制作事情からそこにさらに勝海舟を思慕する画家自身が重ねられているという解釈を示す。

林和利「能・狂言色彩考」(『アリーナ』23)は、能・狂言における色彩の要素を概観して、この世界における色の意識

を考察する。まず色彩の諸相を11に分類する。うち鏡板、揚幕、装束、面については、先行文献を参照しつつ歴史的視点も含めて特に丁寧に見る。揚幕の五色が固定されていたという指摘も。その他、演出上で色を選択する7要素を整理する(色入り・色無し、足袋の色、等)。そのうえで各色の示す意味や価値を検討し、特に白と緑が重視されていると指摘。さらに世阿弥の色彩意識に論及し、『申楽談儀』を中心に伝書における関連記事を検討する。当時は現代より彩色上の裁量があり世阿弥自身にも心配りがあったとしたうえで、「ただし、世阿弥がめざした究極の価値観は色彩否定に通じるものであり、現代の能は概ねその方向で進化していると言えるようか」と結ぶ。

■受容

来日外国人として先駆的な能楽研究をおこなったノエル・ペリは、1922年に急死した。翌1923年にパリ地理学協会講堂で開催された追悼記念会において、在仏日本人が鼓入りの仕舞を披露した。素人によるものだがフランスでの日本人による最初の能の公演である。坂東愛子「藤田嗣治と能」ペリ追悼記念会を通して(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』31)は、この公演に至る経緯と実態とともに、この演能を企画した画家藤田嗣治がこれに関わった文脈を明らかにする。まず藤田が即席で老松と竹を描いた布キャンパスの舞台背景図が紹介されているのが興味深い。こうした関与の背景として、著者は1920年代の日仏外交関係の改善を指摘

し、この出来事が東京における日仏会館設立(1924)やパリ国際大都市日本館の建設(1929)と一連の出来事であるとする。こうしたなか、藤田はペリ追悼会の前年にもコマデー・フランセーズにおける能形式『羽衣』を脚本・演出しており、「日本の表象」の役割を担っていた」と述べる。さらに19世紀後半から20世紀前半のフランスにおける能の受容事例を概観し、この藤田の試みをより長い文脈のなかで評価している。「美術」の枠で紹介しようか迷ったが、海外における能楽受容研究の側面が強いと判断した。

近代文学・演劇における能の受容として、毎年ながしかの論文が書かれるのが三島由紀夫の『近代能楽集』シリーズ。木谷真紀子「三島由紀夫「班女」論・能楽「班女」と日本古典文学における〈花子〉と〈実子〉の系譜」(『同志社大学日本語・日本文化研究』17)は、まず本作の評価が生前に低く死後に高まったこと、原曲からの隔絶が強調されて影響関係の検討がなされていないことを指摘し、三島がこの能をどう理解したうえで作品を構想したかを論じる。ポインツの一つは三島における「待つ人物」のモチーフ。従来の研究は三島作「班女」の人物造形について三島自身のコメントもふまえて西洋文学の影響のみ指摘してきたが、三島の日本古典と観能経験からの影響を重視すべきである由。

近代文学における能の受容といえは、もうひとり夏目漱石。羽田昶「漱石の書簡と日記に表われた謡」(『武蔵野大学能楽資料センター紀要』31号)は、『漱石全集』の書簡と日記から

謡と能に関する記述を集め、時系列順で紹介したものの。謡に興味をもってから熱中し冷めるまでが見て取れる由。

■観光

辻本勝久「訪日客の構成と消費行動の転換に向けた伝統芸能「能楽」の活用」(『Kanazawa空港レビュー』495)は観光学の立場からのレポート。掲載誌は関西空港調査会が発行する。訪日観光客にとって伝統芸能体験の満足度が高いことに着目し、特に関西地域における能楽の観光資源としての可能性を論じる。また、能楽を活用するための提言として、言葉のバリエアの解消、開演時間の分散、VR等の技術の活用、公演情報多言語提供と購入機会の拡大、体験の場の提供、関連文化財への誘客、等をあげる。たとえば最後の点に関しては、関西国際空港の対岸に「紀貫之が登場する能「蟻通」の舞台地・蟻通神社があることを知っている人がどれくらいいるであろうか」と述べる。なるほどそういう視点の効用はあるなと思わされた。

■教育

三宅晶子「トークセッション報告 学校で教える能・狂言」(『能と狂言』17)は、能楽学会における同タイトルのトークセッションの報告。中村雅之氏が語った横浜能楽堂の「子供狂言ワークショップ」と、鶴澤久氏が語った川崎市文化財団の「夏休み能楽体験鑑賞教室」の取り組みを、それぞれ紹介し、その実際と課題を述べた。

村木洋子・佐久間二郎・白日歩「能楽の地謡学習に平均律

教育の蓄積がもたらす影響…『土蜘蛛』演習を通して」(『山梨県立大学人間福祉学部紀要』15)は、大学の教員養成課程(幼稚園及び小学校)の授業実践を通じて学校における邦楽教育の難しさを考える論考。この授業では、山梨出身のシテ方観世流能楽師である佐久間二郎氏の協力のもと、能『土蜘蛛』の謡、仕舞、小鼓を学生が習得する過程を観察し、音楽経験などについての質問紙調査と対照・分析した。それを通じて、それまで西洋式の平均律の音楽によって育まれてきた現代の日本の学生にとっては、「本末転倒ではあるが、邦楽を学ぶことはまるで異文化体験になっている」ことが浮かび上がる。本稿はこうした事情を理解したうえで、教育の必要性を指摘する。

■現代

戦後以降の能界の動向に関する文章をここでまとめる。田口和夫「私の研究史…能楽・説話との六〇年 付録 昭和三〇年代初め一学生の東京能楽体験記」(『藝能史研究』231)は、今や能楽研究の最長老となられた田口氏が、昭和30年代以降の能楽研究の発展に関する「研究史の一証言」として語った自伝である。羽田昶・高橋葉子「『平成の楽劇』能・狂言」(『楽劇学』27)は、楽劇学会第27回大会シンポジウムにおける公演の記録。学部学生であった昭和30年から33年にかけての観能日記の記録が付載されているが、これはひとつの近代能楽史資料と言えよう。羽田氏が東京を中心に、高橋氏が関西の、それぞれ平成期の能楽界の事情を語る。概観し

たのちに狂言抜ききの公演、他ジャンルとの交流などのトピックごとに主要な出来事に言及する。末尾に主要な出来事がリストアップされる。灯台もと暗しで、意外とこの時期の能界の動向をこのようにまとめた文章はなく、貴重。ディエゴ・ベレッキア「京都の能楽におけるコロナ禍の影響…現時点での考察」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』26)は、2020年末の時点で、日本でコロナ禍が始まった2月以降の10ヶ月を振り返った。京都の能界へのフィールドワークに基づき、イベントの延期、稽古への影響、ネットの活用活発化といった動向を伝える。渦中の息づかいが後に貴重な記録として参照されるだろう。

■文化交流

神野知恵「農楽と能楽・国立能楽堂における二〇二〇年交流公演の記録」(『韓国朝鮮の文化と社会』19巻)は、2020年1月25日に国立能楽堂で天籟能の会が主催した「のうがくを知っていますか?」実現に至るまでのレポート。これは韓国の農楽(門クツ、成造ブリ、パンクツ、コツカルソグチュム)と日本の能楽(半能「賀茂」間狂言「御田」)を併せて上演する企画である。実現の経緯は、まず天籟能の会が多田富雄作『望恨歌』上演をシテ方観世流の清水寛二氏に依頼し、清水氏から著者の神野氏に韓国の芸能者と共同制作したい旨の仲介依頼があり、その後、徴用工問題等の状況下で『望恨歌』上演が難しいなか、可能な形態を探って当日に至ったというもの。この種の文化交流が、いかに当事者同士

の信頼と熱意によって動くものであるのがわかる。なお、農楽との共演による『望懐歌』上演は翌年の第9回天籟能の会(2021年12月25日)で実現した。また本稿は野村信一ほか編『能楽の源流を東アジアに問う』(風響社、2022年)に再録されている。(横山)

【外国語による能楽研究】

◎単行本

○Anno, Mariko. *Piercing the Structure of Tradition: Flute Performance, Continuity, and Freedom in the Music of Noh Drama*. Cornell University Press.

一噌流の能管を習う著者がその伝統と革新を論じる。能管の構造と技法、曲中における役割を解説し、〈敦盛〉と〈鷹の泉〉(改作や英語版も含む)を例として、囃子の固定された伝統と形式がいかに重要であるか、またそのなかで奏者がどのように創造性を発揮するかを明らかにする。本書は能管の音楽面を分析し役割を明らかにした英語文献として貴重であり、五線譜で呂中干の旋律を表したり、著者のウェブサイトから音源が聞けたりと、日本語を解しない読者にもわかるよう工夫がされている。国外での研究が今後発展する契機にもなることが期待できる。

◎論文

○Hintereder-Ende, Franz. "The Dream in Japanese Noh

Drama." In *Meditating the Dream / Les genres et médias du rêve*, edited by Bernard Dieterle and Manfred Engel. Königshausen & Neumann, 429-447.

夢分析、文学、美術など、夢の文化的側面についての研究書のなかに収録されている論考。夢幻能のドラマツルギーが舞台空間、ワキの役割と、面や型による演技によって成立しているとして、〈井筒〉〈敦盛〉〈松風〉を例に夢幻能のヴァリエーションを示す。演技や舞台空間によって夢のフィクション性が強調される一方で、綿密な間テクスト性とイメージの積み重ねが心理的ドラマを創り出していると述べる。

○Jelcsijevic, Dunja. "Shinto Spaces and Shintsubu Interaction in the Noh." In *Exploring Shinto*, edited by Michael Pye. Equinox, 151-172.

〈山姥〉と〈野宮〉を例に、能のシテがどのように神仏習合の枠組みの中で位置づけられ、重層的な空間において相互の交流を促すかを論じる。神道では山や水辺、また場といった空間そのものが神道のコスモロジーを表しているのに対し、仏教は非二元論の下での空間でも教化の場となりうる、という理解に基づき、神道の空間(山や神社といった場所、そこにある自然、またその中に身を置く人物)でシテが成仏を願うことによって、仏教のコスモロジーが神道のコスモロジーの中に取り込まれていると述べる。上記の二曲においては、物理的・地理的空間と、そこに存在する事物が有機的・体系的

に結びつくように設定されており、相容れない要素も一体とすることによって、異なる宗教的伝統を和合する場として能が成立すると主張する。

○ Takeuchi, Akiko. "The Fusion of Narration and Character Voices in Noh Drama: A Narratological Approach to Zeami's *God Plays* and *Warrior Plays*." *Narratological Perspectives on Premodern Japanese Literature* (Special Issue 7): 113-49.

能の詞章の特徴の一つである話し手の人称の不明瞭さについて、世阿弥の神能と修羅能を取り上げ、そのナラティヴの構造の違いともたらす効果を分析する。修羅能においては、シテとワキないし地謡の発話が一体となっても最後にはシテの呼びかけで終わり、コミュニケーションが登場人物内で完結するのに対し、神能においては人称が不明瞭なままであり、それゆえに御代を寿ぐという趣旨が観客(将軍)にも及ぶことができる、と指摘する。そこには能の社会的・宗教的なねらいにあわせて人称を曖昧しておく(あるいは、しておかない)世阿弥の意図が見える、と結んでいる。

○ Rockell, Kim. "Knowing Noh and 'No-Ing' English through Intercultural Performing Arts." *International Journal of Education & the Arts* 21 (10/11): 1-22.

話す機会が不足していると言われる日本人の英語学習において、音楽や演劇を用いてその欠点を克服しようとして試みてき

た著者が、2018-19年に日本のコンピューター学科の大学生に能の様式を取り入れた英語劇を上演させる試みを行い、準備段階から上演後までを報告したもの。あくまで教育目的での能の利用であるため、本論はその教育的効果が主な趣旨であるが、謡を英語で謡うことが英語の使用に自信をもたらすこと、学生の能への関心が高まったことや、慣れ親しんだもの(日本語)、コンピューター用語と異質なもの(英語)の文化交流が学生に良い影響をもたらしたと述べる。

○ Viatte, Chloé, and Nishino Ayako. "Le nô Dame Aoi-no-ue ou le drame de l'absence: Essai de traduction des pièces de nô jouées à Paris lors du festival Japonismes 2018." 『葵上』あるいは不在の(悲)劇: パリ能楽上演曲目の試訳 『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』70: 27-69.

2018年から2019年にかけてパリで開催されたジャポニスム祭において上演された能のうち、〈葵上〉について、海外受容史や海外向け文献に言及しながら、曲の特色や翻訳の工夫を論じたもの。〈葵上〉の理解のカギが不在(葵上、源氏、青女房などの視覚的不在や、本説に沿っていないこと)にあると、この立場に基づき、上演時に字幕とパンフレットの相互補完で観客の理解を助けながらも、説明もしすぎずに、不在と解明のバランスの良い訳を目指したことを述べる。

○ …, "Le nô Kinuta, l'amor écho: essai de traduction des

pièces de nô jouées à Paris lors du festival Japonismes 2018.”『砧』 閨怨の響を：パリ能楽上演曲目の試訳『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』71:17-63.

同著者によるジャポニスム祭の上演曲(砧)についての論考。恨み、砧など曲のモチーフと、「待つ女」であるシテの感情を、文学的背景を含めて字幕と詞章の翻訳を示しながら詳細に解説する。エズラ・パウンド、ノエル・ペリの訳やポール・クロードルの引用等の紹介もあり、フランス語圏読者に向けた解説といった趣である。

○ Matsumoto, Kaoru, and Akiko Manabe. “A Kyogen Version of Yeats’ *Kiogen*: On Directing *The Cat and the Moon* in Japan.” In *Yeats and Asia: Overviews and Case Studies*, edited by Sean Golden. Cork University Press, 181-190.

W・B・イェイツによる詩劇“The Cat and the Moon”が狂言に再翻案され、2015年11月10日に神戸学院大学において初演された。その総合演出を担った大蔵流狂言方、松本薫による講演(2016年イェイツ国際学会、バルセロナ)を真鍋晶子が英訳したもの。上演にあたっての原作の解釈や工夫、学んだ事を述べる。

○ Sato, Yoko. “Fenollosa’s Manuscript of *Kikazu Zato*: The Japanese Source of Yeats’ *The Cat and the Moon*.” In *Yeats and Asia: Overviews and Case Studies*, edited by Sean Golden. Cork

University Press, 169-180.

イェイツの詩劇“The Cat and the Moon”のもととなった狂言(不聞座頭)について、アーネスト・フェノロサのノートと大蔵虎寛本および和泉流狂言大成を比較し、フェノロサのテクストがどちらにも基づいていないことを示し、『続狂言記』(一七〇〇年)からの翻訳である可能性に言及する(ただし詳細な検討はなされていない)。また、一見、狂言の本筋とは関係が希薄なように見えて登場人物の置かれている状況との差異を演出する小歌の翻訳が“The Cat and the Moon”にも影響を与えたと結論づける。

○ Golden, Sean. “Noh Theatre.” In *Yeats and Asia: Overviews and Case Studies*, edited by Sean Golden. Cork University Press, 211-229.

イェイツがフェノロサ、野口米次郎、パウンド、伊藤道郎等から能楽を学び、創作に生かした過程を概説する。能楽に関する言及は前半のみで、後半は彼が影響を受けたアジア(中国と日本)の文献や精神論について述べる。

この他、ブラジル人芸術家による(羽衣)翻案に関するスペイン語文献、能と暗黒舞踏に影響を受けた舞踊作品に関するリトアニア語文献、崑劇と狂言の公演についての中国語文献がそれぞれ一点ずつあった。(宮崎)